

## 8. 中山間地域における女性高齢者によるグループ農業の成立条件

多賀谷昭, 北山秋雄, 深山智代, 那須裕 (長野県看護大学), 吉村隆 (長野県看護大学大学院)

キーワード: グループ農業, 中山間地域, 女性高齢者, 遊休農地, 地域アイデンティティ

中山間地域において女性高齢者によるグループ農業が成立するための要件を検討するために、伊那谷地域のグループ農業の実態調査を行い、また、伊那谷および木曾谷の農産物直売所 15 箇所まで農産物の観察と聞き込み調査を行った。その結果から、グループ農業は、地域アイデンティティや共同体意識の強い地域で成立しやすく、その活動を通じた地域アイデンティティの表出と認知は、表出者および認知者の精神的な健康を維持・増進し、また共同体としての活動は、相互扶助ネットワークを点検・強化し、過疎地高齢者の心身の健康の増進に役立っていると考えられる。

### A. 目的

近年、中山間地域で遊休農地を利用したグループ農業の試みが行われており、中でも高齢期の女性グループによる農業活動の試みは注目に値する。このような活動は社会支援ネットワークの維持に役立つとともに高齢女性の健康維持に役立つ可能性があると考えられる。また遊休農地の荒廃による生活環境の悪化防止に役立つと考えられる(深山ら, 2010; 吉村, 北山, 2010)。

そこで、本研究では、伊那谷および木曾谷におけるグループ農業のあり方の実態とそれに関係する地域的特徴を明らかにし、それに基づいてグループ農業の成立の要件を検討することを主な目的とした。

### B. 方法

①伊那谷地域の女性高齢者によるグループ農業の実態を調査した。調査は2008年4月から2010年11月にかけて、聞き込み、参加観察、およびグループインタビューを用いて行った。研究計画は、長野県看護大学の倫理委員会の承認を受けた(平成20年2月、審査番号#31)。

②伊那谷地域および木曾谷地域の主要な道路ぞいの道の駅などの農産物直売所15箇所まで、農産物の種類の観察および聞き込み調査を行った。調査は2008年4月から2011年3月にかけて随時行った。

### C. 結果

#### ①グループ農業を行う団体の実態調査

大鹿村と飯田市の各1団体、計2団体がグループ農業を行っていることが確認できたが、木曾谷地域では見出すことができなかった。

大鹿村のグループ農業は、地域が誇りとする歴史的建造物や地域の象徴となっているイチヨウの大木の傍の遊休農地を利用し、17、8人のメンバーで活動が行われて

おり、その近くには、グループの会合や物品の保管のために、地域の男性たちによって作られた建物がある。草取りなど日常的な活動はグループのメンバーが分担して行うが、植え付けや収穫祭などの活動には、地域の子どもや男衆が参加するなど、地域共同体の世代間交流や文化継承の場となっていた。作物は特産の大豆やコキビなど地域性の強いものが多く植えられ、また登山者や地域の人々が通る道路に面した部分には、季節に合わせて草花が植えられていた。収穫物は収穫祭でふるまう餅などに利用され、販売もされるが、メンバーに分配できるほどの利益は得られていなかった。

飯田市では6人前後で活動する女性グループが、河岸段丘の遊休農地で大豆とソバを栽培していた。活動はグループのメンバーだけで行い、農作業の後には、リーダーの自宅で茶話会を開いていた。耕作には賃借のトラクターを使用していた。収穫物の売却利益や大豆で作った味噌は、貢献度に応じて分配していた。グループは、親睦および生産活動のための個人の任意の集まりという側面が強いが、グループ発足のきっかけが、伝統の鯖鮓作りのために女性たちが集まったことであるという点には、地域共同体のアイデンティティの維持という要素が認められる。その鯖鮓は、リーダーによって事業化され、伊那谷の農産物直売所で販売されていた。

#### ②農産物直売所の調査結果

伊那谷地域では道の駅など、10箇所の直売所を調査した。果実類は一般的な品種に加えてカキ、リンゴ、ナシなどで地域性の強い品種が多く見られた。野菜は一般的なものに加えて、マコモタケ、ルバーブ、ギョウジャニンニク、辛味ダイコン、伝統品種のジャガイモ、カボチャ、キュウリ、ウリ、ナスや地域特産の茶、激辛トウガラシなど地域性の強いものが多く、秋には、クロカワや

ショウゲンジ、アマタケといったキノコ類が見られた。商品を買求める客は、観光客よりも地元の人々が多い傾向がみられた。

一方、木曽谷地域では5箇所の直売所を調査した。地域性や個性の強い農産物は伊那谷に比べて少なく、長野県各地の他地域の産物や、北海道産の穀類も多く販売され、キノコはマツタケが中心であった。ただし、特産のスンキヅケのみは、グループで作られている場合もあった。商品を買求める客は、観光客が主であった。

#### D. 考察

大鹿村に比べて飯田市のグループ農業は、個人的交流や生産活動としての側面が強く、地域アイデンティティーや地域共同体としての活動という性格は比較的弱い。

これは、この地区が伊那谷の主要な交通路に近く、地域としての特異性が大鹿村ほど顕著でないことが関係していると考えられる。しかし、もともとこのグループは地域の祭りに欠かすことができない独特な製法の鯖鮭の伝統を維持するために発足したものであり、地域アイデンティティーや地域共同体に関係する活動としての要素もっていることが注目される。

農産物直売所で販売される農作物やその加工品は伊那谷と木曽谷とで性格が大きく異なっており、木曽谷では観光客相手の一般的な経済活動として農産物の売買が行われているが、伊那谷の農産物直売所においては、農産物の販売と購入が、経済活動としての側面とともに地域アイデンティティーの表出と認知という側面を強く持っていると考えられる。

地域アイデンティティーの表出や共同体としての活動という性格は、大鹿村のグループ農業では、耕作地の立地、集会所の名称(お堂のやかた)、作物の種類、収穫祭で販売する農作物、振る舞われる食品など、活動のあらゆる面において顕著に認められる(深山他, 2010)。飯田市のグループ農業では、地域アイデンティティーの表出や地域共同体の維持という性格は活動に関しては希薄であるが、グループ発足の契機となった鯖鮭作りには明らかに含まれている。また、グループ農業が見られなかった木曽谷でも、地域アイデンティティーをもつスンキヅケの生産については、それを行うグループが存在する。

これらのことから、伝統的な地域アイデンティティーが強いことがグループ農業の成立条件として最も重要な要素で、地域共同体がどの程度しっかりしているかもグループ農業のあり方に影響を与えると考えられる。大鹿

村のように地域アイデンティティーと共同体意識の両方が強い地域では、グループ農業は経済性にさほど左右されることなく成立し得るが、飯田市近郊のように地域アイデンティティーが強くても、都会化が進み、共同体意識がさほど強くない場合には、グループ農業は経済性を無視しては成立し難いと考えられる。

さらに、グループ農業が地域アイデンティティーの表出という側面をもつからには、それを認知する者の存在が必要である。伊那谷の場合、グループ農業の実態や農産物直売所の状況から推測すると、地域アイデンティティーの認知は、主に当該地域や近隣地域の住民、登山者などによって行われているものと思われる。一方、木曽谷でその役割を期待されるのは観光客であるが、多くの場合、観光客による地域アイデンティティーの認知は、地域の住民やその地域を良く知る登山者などによる認知に比較して目が粗く、一部の有名観光スポットを除くと、「信州」あるいは「木曽谷」といったレベルに留まるものと思われ、道の駅などの販売品の地域性の弱いことは、このことが影響していると考えられる。

#### E. まとめ

グループ農業は、地域アイデンティティーや共同体意識の強い地域で成立しやすく、その活動を通じた地域アイデンティティーの表出・認知は、表出者および認知者の精神的な健康を維持・増進し、また共同体としての活動は、相互扶助のネットワークの点検と強化を通じて、過疎地で暮らす高齢者の心身両面の健康の増進に役立っていると考えられる。

本研究は平成19年度～22年度科学研究費補助金(基盤研究(C))の助成を受けて行った研究の一部である。

#### 文献

深山智代, 多賀谷昭, 北山秋雄, 那須裕, 野坂俊弥: 里山の環境を保全し健康資源として利用するための諸条件—高齢期の女性有志による里山の遊休農地を利用したグループ農業活動事例の調査から—。長野県看護大学紀要, 12: 1-7, 2010。

吉村隆, 北山秋雄: 山間地域に暮らす住民のソーシャルキャピタルに関する研究—グループ農業活動によるソーシャルキャピタル醸成の可能性の検討—。信州公衆衛生学雑誌, 5(1): 58-59, 2010。